



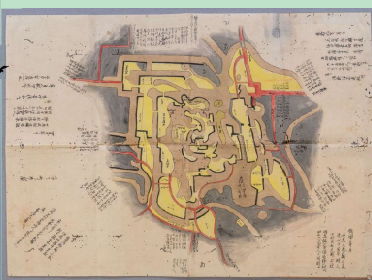
本図は、横濱市歴史博物館「秀吉観来」及び行田市郷土博物館「天正十八年」掲載図を参考に、地理院地図の赤色立体地図及び淡色地図を用いて作成した。なお、図中の日付は注記がない限り開城・落城日を示すものとする。

天正18年 小田原攻め 豊臣軍行軍図

- 豊臣軍本隊
- 東海道軍（浅野・木村）
- 東海道軍（石田）
- 北方軍（前田・上杉・奥田）
- 水軍（毛利・九鬼軍ほか）
- 主な反北条勢力の城

特集展示. 城絵図

埼玉景地域には、豊臣軍に攻められた城跡が遺跡としてだけでなく、城絵図や町割りとしても残っています。城絵図は曲輪の配置、周辺の地形などを描いた絵図です。城絵図に武将名などを落とし込んで、城攻めの様子を復元する目的で作られたものもあります。これらの城絵図を、当館収蔵の埼玉県航空写真と一緒に眺めれば、城絵図に描かれた町割りが現代にも通じていることがわかります。



忍城絵図(中村(宏)家文書182)

◀本資料は、豊臣軍による忍城攻めの様子を復元しようとする城の各口に対応する野郎の名前などを書き込んだ城絵図です。どこで何人豊臣軍の負傷者が出たかや、案内をした者の名前など、武将名以外にも戦況の書込みがなされているのが特徴です。

▲上左(堀大(山奥口)) 中左(堀大(下堀口)) 上右(堀大(下堀口))



▶本資料は、鉢形城を豊臣軍が攻めた際の様子復元しようとする書込みされた城絵図です。好古家として有名な小室家の資料で、右下には「馬場」という署名と印があります。小室家文書90には、小室家と鉢形村戸長長尾孫助とのやり取りがあります。この城絵図についても、鉢形に在する馬場家との意見交換などがあつたと考えられます。好古家の熱心な、幅広いネットワークをうまく知ることが出来ます。

なお、小室家文書6459にも同内容の図があります。そこには、署名と印は無く、消されたものと考えられます。

昭和41年の忍城付近(埼玉県航空写真 S41 A7-14) 鉢形城城張り図(小室家文書6457)

本紙は、令和8年1月31日(土)から4月26日(日)を会期として、埼玉県立文書館が開催する同名展覧会の解説リーフレットである。本紙には展示資料の一部のみを掲載しており、本紙の掲載範囲は会場での展示順と異なる。

豊臣秀吉の名は、年代によって木下藤吉郎、羽柴秀吉、豊臣秀吉と変遷するが、混乱を避けるため「豊田秀吉」で統一した。他の人物についても同様とした。

本展覧会は、青木裕美(当館学芸員)が企画・計画し、青木及び伊藤由佳(同)、村田敏(同)が展示・レクレーション及び本紙の執筆を担当した。なお、執筆の担は学芸員の伊藤である。

はじめに〜第3章及びおわりに:青木裕美 第4章:伊藤由佳
 特集展示:村田敏

表紙面画:「絵本太閤記 初篇」(東家文書271~274)
 豊田秀吉(幼年倶楽部 第十巻 第九号 附録)(古沢家文書2420-1)
 豊田秀吉(少年倶楽部 第二十四巻 第一号 附録)(古沢家文書2420-10)
 「講談社の絵本 豊臣秀吉」(川田氏収集文書3394)

埼玉県立文書館 令和7年度企画展 「戦国乱世の終焉と泰平の世 ー豊臣軍がやってきた!ヤァヤァヤァ!!!ー」 解説リーフレット

発行 埼玉県立文書館
 発行日 令和8年(2026)1月31日
 〒330-0063
 さいたま市浦和区高砂4丁目3番18号
 電話 048 865 0112
 FAX 048 839 0539

埼玉県立文書館 企画展

戦国乱世の終焉と泰平の世

豊臣軍がやってきた!

ヤァ! ヤァ! ヤァ!

会期:2026/01/31(sat)~2026/04/26(sun)

開催にあたって

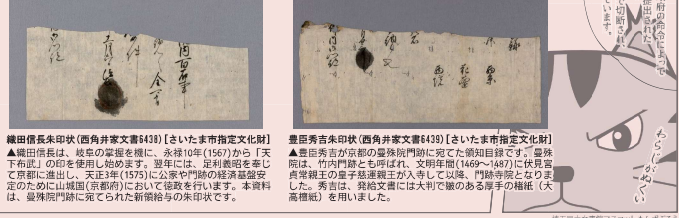
天正18年(1590)、関東に権勢を誇った小田原北条氏は、豊臣秀吉の攻撃を受けて滅亡しました。小田原落城後、徳川家康の江戸入城によって関東は新たな時代を迎えます。本展覧会では、戦国時代末から江戸時代初めの埼玉景地域を取り巻く情勢を、収蔵資料から紹介します。今年は各地で豊臣秀吉に関わる展覧会が予定されています。当館の企画展は、ほぼ収蔵資料によって構成されています。本展覧会には有名な肖像画も鑑や兜もありません。限られた収蔵資料から、中近世移行期の埼玉景地域の状況を読み解き、それを日本史の中に位置づけていただくことを本展覧会の目的とします。なお、今回の展示資料は、会期終了後、当館2階の閲覧室でお手にとってご覧いただけます(なお、貴重文書は要事前申請)。本展覧会が、皆様にとって地域の歴史資料に触れるきっかけとなることを願ってやみません。

令和8年1月31日 埼玉県立文書館

文書館マスコット もんしろう

はじめに - 信長と秀吉 -

戦国大名が割拠し、国衆らが戦乱をくり広げた戦国時代後期において、天下統一の途を進む織田信長の勢力にも及びました。この統一事業は、信長の死後、豊臣秀吉に引き継がれることとなります。本展覧会の導線として、西角井家文書の請負寺社朱印状のうち、同じ寺院(山城国叡吉郡曼殊院)に宛てられた信長と秀吉の宛給文書を紹介いたします。



織田信長朱印状(西角井家文書438)【さいたま市指定文化財】

豊臣秀吉朱印状(西角井家文書6438)【さいたま市指定文化財】

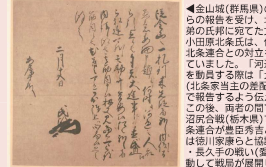
織田信長は、岐阜の軍権を握り、永禄10年(1567)から「天下布武」の印を使用し始めます。翌年には、足利義昭を奉じて京都に退出し、天正3年(1575)に八景の戦いで豊臣秀吉の討伐を命じられた山城国(京都府)において徳政を行います。本資料は、曼殊院跡に宛てられた新給付の朱印状です。

豊臣秀吉が京都の曼殊院跡に宛てた御知目録です。曼殊院は、竹内門跡とも呼ばれ、文明年間(1469~1487)に伏見長樂殿の皇子慈蓮親王が入寺して以降、門跡寺院となりました。秀吉は、宛給文書には大判で銀の裏手の堀尾(大高権様)を用いました。

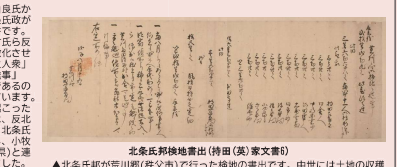
埼玉県立文庫蔵「マスコットくん」

1. 統一政権と武蔵国

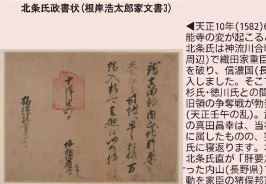
天正10年(1582)、織田信長によって甲斐斐呂氏が滅びます。これに伴い、斐呂氏旧領の国分協定が行われました。武蔵国は小田原北条氏の領国として確定するものの、隣接する上野国(群馬県)、信濃国(長野県)、甲斐国(山梨県)は織田領国となり、これによって武蔵国北部は北条氏と織田氏の権力の境目となりました。この国分は、本能寺の変による信長の急逝で幕を閉じます。本章では、天下統一が進められていく情勢の中で、武蔵国の動向を位置づけます。



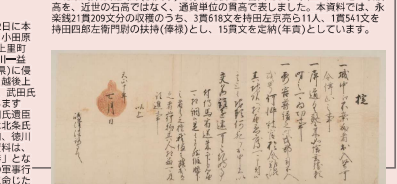
北条氏政書状(榎岸浩太郎家文書3)



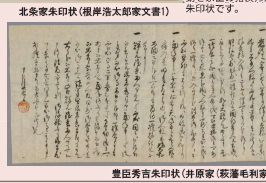
北条氏邦が荒川郡(狭父町)で行った検地の抽出です。中世には土地の収穫高を、近世の石高ではなく、通算単位の貫高で表しました。本資料では、永楽銭21貫29文分の収穫のうち、3貫618文を持田左京亮ら11人、1貫54文を持田御左衛門尉の持持(律師)とし、15貫文を定額(年貢)としています。



北条家朱印状(榎岸浩太郎家文書1)



上杉景勝提案(島津家(米沢藩上杉家家中)文書27)



豊臣秀吉朱印状(井原家(萩藩毛利家家中)文書1)

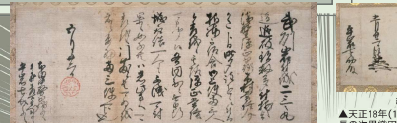
▲天正10年(1582)6月2日に本能寺の変が起こると、小田原北条氏は神川川合戦(上里町周辺)で頼朝重臣河川川一忠を破り、信濃国(長野県)に侵入しました。そこで、頼朝は旧領の争奪戦が勃発します(天正十年の乱)。武田氏連合の東進は、当初は北条氏に属したものの、突然、徳川氏に寝返ります。本資料は、北条氏面が「頼朝之書」となっていた山崎城跡の御書状です。

▲天正15年(1587)、豊臣秀吉は九州平定を終え、大坂城に凱旋しました。しかし、在地勢力の抵抗は続き、本資料は、宛先は欠けていますが、毛利元元・小早川隆景の動静や慶福神社への参進米の兵糧配用などの内容から、大坂にいた秀吉が毛利氏の関係者に宛てたものと考えられます。西国を平定した秀吉の眼は、関東へ向きます。

2. 秀吉の小田原攻め

▲天正18年(1590)、豊臣秀吉は北条氏の本拠小田原城(神奈川県)を攻めました。日本海側から前田利家・上杉景勝らの北方軍が浦津峠を越えて関東に侵攻する一方、小田原城を包囲した主力軍から編成された後援長官(木村常陸介)が、石田三成らの軍勢が武蔵国を侵襲します。関東の国衆や大名たちは小田原に籠城し、地元に残された一族や家臣が豊臣軍の攻撃に備えました。本章では、戦禍に巻き込まれた武蔵国の情勢と、豊臣政権による戦後処理の様子を収蔵資料から読み解きます。

▲豊臣秀吉は、天正15年(1587)に関東平定へ本格的に乗り出します。▲高橋を感した北条氏直は、相模に武蔵国に入攻を許しました。本資料は、天正16年頃に、前田利家と木村常陸介が「籠城(寄)御知目録」のために宛給した文書です。「寄・凡下」を問わす動員可能な戦馬を把握するためのものでした。



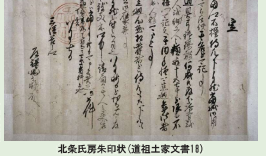
豊臣秀吉朱印状(埼玉県立文書館収蔵 平岩文書1)

▲本資料は、寄付城の籠城前線にあった浅野長吉・木村常陸介から格書を宛てた豊臣秀吉が平岩親吉ら3名に宛てたものです。親吉らも、寄付城攻めの中で亡くなりました。秀吉は、城内に求めた人もあらずごとく討ち取り、子どもは小田原城へ連行するように求めています。



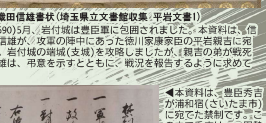
浅野長吉・木村常陸介連署格紙(前欠)【北野天神社文書155】

▲本資料は、浅野長吉らが自らの放火や「非分」(非常な行為)などを禁じたもので、前部分分が欠けています。北野天神社(所沢市)に宛てられたものと考えられます。



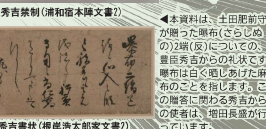
北条氏房朱印状(道祖土家文書1)

▲天正18年(1590)5月、前川城は豊臣軍に包囲されました。本資料は、白土の次男織田信雄が、攻め陣の中にあつた徳川家康の弟の平岩親吉に宛てたものです。吉付城の砲撃(支城)を攻撃しました。親吉の弟が戦死したことで、信雄は、帯巻を示すことにも同意を強要するように求めています。



豊臣秀吉祭札(清和福太郎家文書2)

▲本資料は、土田郡前守が焼けた陣布(さらばじめ)の2張(2)について、豊臣秀吉に、その状況と、陣布は白く染めあげた陣布の色を指します。この陣布に染められた豊臣時代の使者は、堀田長盛が行っています。



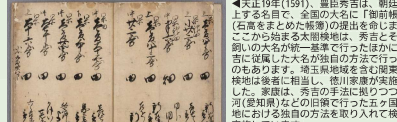
徳川家康朱印状(加藤家(徳本)文書1)

▲本資料は、徳川家康が加藤嘉助(正次)に武蔵国比企郡・土籠(保原郡)に約2,000石を宛てた御知目録です。関東へ入部した家康は、まず大身の家臣に知行割を進め、その配属の下に、中小級の家臣の知行割を進め、加藤家は、三河・駿河時代から家康を支えた譜代の家臣です。

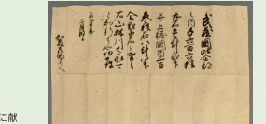
◎「分付配割」について
江戸時代中期以降に成立した地籍制度は、年貢(土地所有)と土地所有者の名のみが記載されますが、奥川川の初期帳簿では分付(土地所有)と名とも併記(併用)が記されています。

3. 家康の関東入部

小田原北条氏の滅亡後、豊臣秀吉の命によって三河国(愛知県)から徳川家康が関東へ入部します。これによって、関東の戦国乱世は終焉を迎えることとなります。家康は、それまでの社会構造を踏襲しつつ、新たな支配体制を構築していきます。本章では、豊臣政権の動向と、「豊臣大名」としての家康による武蔵国を中心とした関東支配、特に獲得権利の保障や検地などに焦点を当てます。



武州立太郎頼朝頼国三宅村頼打水帳(足立(神主)家文書314)



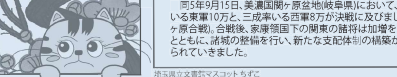
徳川家康朱印状(加藤家(徳本)文書1)

▲本資料は、徳川家康が加藤嘉助(正次)に武蔵国比企郡・土籠(保原郡)に約2,000石を宛てた御知目録です。関東へ入部した家康は、まず大身の家臣に知行割を進め、その配属の下に、中小級の家臣の知行割を進め、加藤家は、三河・駿河時代から家康を支えた譜代の家臣です。

◎「分付配割」について
江戸時代中期以降に成立した地籍制度は、年貢(土地所有)と土地所有者の名のみが記載されますが、奥川川の初期帳簿では分付(土地所有)と名とも併記(併用)が記されています。

4. 江戸開幕

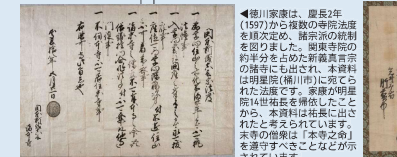
慶長8年(1603)、徳川家康は征夷大将軍に任じられます。正式に全国を統治する権力を獲得し、ここに江戸幕府が誕生しました。その後、大きな混乱を伴うことなく、将軍職は2代秀忠、3代家光へと引き継がれました。政権を担っていくことが示されたのです。本章では、「天下人」となった徳川将軍家が、新たな秩序の構築をすすめる、戦乱のない「泰平の世」の基盤を築いていった過程を、館蔵資料から紹介します。



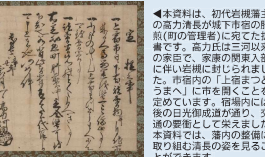
埼玉県立文庫蔵「マスコットくん」

4. 江戸開幕

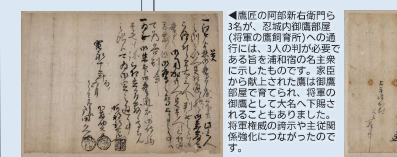
慶長8年(1603)、徳川家康は征夷大将軍に任じられます。正式に全国を統治する権力を獲得し、ここに江戸幕府が誕生しました。その後、大きな混乱を伴うことなく、将軍職は2代秀忠、3代家光へと引き継がれました。政権を担っていくことが示されたのです。本章では、「天下人」となった徳川将軍家が、新たな秩序の構築をすすめる、戦乱のない「泰平の世」の基盤を築いていった過程を、館蔵資料から紹介します。



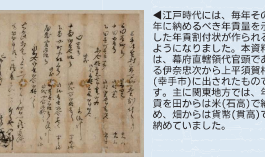
開元新義真言宗法度(明聖院文書10)



高力清長提案(勝田家文書160)



御座御用入足定書(清和福太郎家文書5)



上平須賀村年貢割付状(船川家文書954)

おわりに - 史実と偶像 -

現代に至るまでの歴史の流れの中で、歴史の人物は時に神格化され、また時に英雄視されました。それは、各時代の為政者の意識や社会的背景によるものが大きくあります。これは、近世以降に豊臣秀吉を取り上げた資料を紹介する本展覧会の内容とも照らし合わせることで、資料から得られる史実と脚色された偶像の違いを見つめ直していただければ幸いです。



「絵本太閤記 初編」(東家文書271~274)



「談話社の絵本 豊臣秀吉」(川田氏収集文書534)

▲私たちの知っている豊臣秀吉のイメージは「太閤記」によって形作られていると言っても過言ではないです。その前、若狭の秀吉を、徳川大村由己の「天正記」や太田平一「日本書紀」を基に、小瀬南庵が著したものです。物語調で記述されたこととあり、歴史と物語の区別が薄れています。そして、江戸時代中期には、「絵本太閤記」が流行し、浄瑠璃で上演されました。

▲昭和時代、国内外の信人の生涯を叙述した児童向けの伝記が人気を博し、また、本資料は、大日本美術会談話社が刊行した「偉人伝話本」です。同社の雑誌「少年倶楽部」が学校教師から小学生を、幼少児童部が小学校低学年から、5年生をターゲットにしたのが、本書がさかんに低年齢層に受けられた理由です。